



2023年1月のプレスセミナーより 「中高年の矯正歯科治療—8020達成を目指して—」

ハチ・マル・ニー・マル

矯正歯科専門開業医の全国組織である公益社団法人日本臨床矯正歯科医会(会長:野村泰世)では、2023年1月23日(月)、メディア各社に向けて「中高年の矯正歯科治療—8020達成を目指して—」と題したセミナーを開催しました。今回はその内容を踏まえ、8020の達成と中高年の矯正歯科治療の関係性についてご紹介します。

歯を失うリスクを高める不正咬合

当時の厚生省と日本歯科医師会は“80歳になっても20本以上自分の歯を保とう”を目標に、1989年から「8020運動」を推進しています。8020達成者は、この運動が始まって間もない93年には10%弱でしたが、16年の調査では50%超(2人に1人)となり、現在は達成者を60%にする新たな目標が掲げられています。

ここで気になるのが、一体どのような理由で歯を失っているのかということです。

理由のトップ3は、「歯周病」「むし歯」「破折」。このうち、歯周病とむし歯が約67%を占めています【グラフ1】。歯周病やむし歯になる主な原因は、食べかすや歯垢の磨き残しですが、歯並びや咬み合わせの悪さも歯を早期に失うことにつながります。

U字形のアーチを描いてすべての歯が隙間なく並んだ「正常咬合」に対し、咬み合わせに問題のある「不正咬合」は歯ブラシが届きにくいだけでなく、一部の歯に過剰な力や横揺れの力がかかるため、むし歯や歯周病の進行を助長してしまいます。

それを裏づけるように、8020達成者と咬み合わせの関係を調べたところ、達成者の中には「反対咬合」や「開咬(かいこう)」といった不正咬合の人は一人もいなかったという結果となっています【グラフ2】。

70代で矯正歯科治療を始めたAさんの場合

ご紹介するAさん(70代・女性)は、奥歯は左側に咬み合わせがずれた「交叉(こうさ)咬合」、前歯は下の歯が上の歯の外側に位置する「反対咬合」で、すでに下の歯が6本失われた状態でした。また残っている歯も、上下の歯の咬み合わせが前後にずれた状態で、治療前はかなり歯肉退縮が進んでいました。これを放置するとさらに歯を支える歯槽骨に負担がかかり、早晚、歯を失うことになるでしょう(右①参照)。

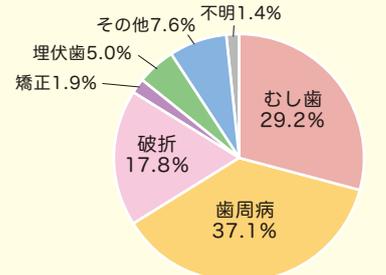
治療では、矯正歯科で残った歯にマルチブラケットを装着すると同時に、一般歯科で抜けた歯の部分にインプラントを埋入し、咬み合わせを整えていきました(金属のかぶせ物をした歯や神経を抜いた歯も、矯正歯科治療で動かすことができます)(右②参照)。

約2年の治療期間を経て、奥歯の咬み合わせが改善されたことで咬合高径(咬み合わせの高さ)が上がり、ものを噛める咬合となりました。しかし、歯を動かす距離に限界があったため、下の歯に隙間が残っています。もっと早くに矯正歯科治療を受けていれば、歯を必要以上失うことなく、より満足のいく治療ゴールが設定できたと思われます(右③参照)。

不正咬合の改善は、口の中の健康維持に役立ちます。しかしその一方、長年、口腔内の問題を放置しておくとう治療計画が複雑化し、また矯正歯科治療以外に、インプラントや補綴治療などを併用することとなり、治療期間や費用が多くなってしまいます。

グラフ1

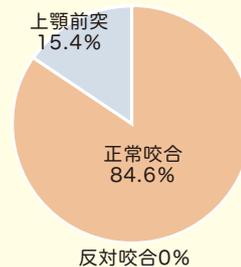
抜歯の主な原因の割合



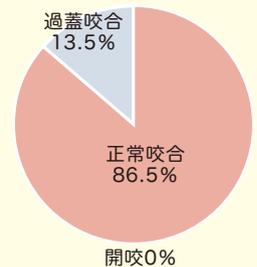
出典:公益財団法人
8020推進財団
「平成30年(2018年)の
第2回永久歯の
抜歯原因調査」

グラフ2

前後的位置関係



上下的位置関係



出典:「Dental Prescaleを用いた8020達成者の咬合調査」
竹内史江、宮崎晴代他 歯科学報 105(2)154-162,2005年



歯周病やむし歯の予防に役立つ
矯正歯科治療は、究極の予防歯科です。
8020を達成するためにも、早めに
矯正歯科を受診することをおすすめします。

日本臨床矯正歯科医会からの提言

ハチ・マル・ニー・マル

50代半ばまでに矯正歯科治療を受け、8020達成を目指しましょう!

ここでは50代で矯正歯科治療を開始し、8020を達成した患者さんと、達成が見込める患者さんの2症例をご紹介します。厚生労働省の歯科疾患実態調査では55歳を超えると歯数の減少が加速することが示されています。歯並びや咬み合わせが気になる人は、50代半ばまでに矯正歯科治療を受け、8020を達成しましょう。

症例1

53歳で治療を開始し8020を達成したBさん(80歳)
主訴: 反対咬合

① 治療前(53歳)

下顎が前に出た「骨格性下顎前突」で、下顎は小白歯から前に空隙があり、右側の犬歯(前から3番目)から左側の第1小白歯(前から4番目)までの7本が完全に「反対咬合」になっていました。

② 治療開始から約2年半

矯正歯科治療によって歯列が整い、隙間はなくなっています。また、咬み合わせが逆だった右側の犬歯から左側の第1小白歯までの7本の歯のかぶさりも改善されました。

③ 治療後(58歳)

約4年半かけて歯を動かした結果、前歯の正中線(上下の前歯の中心線)が一致し、1歯対2歯(犬歯から奥の歯が、上顎の歯1本に対して下顎の歯2本の割合で咬み合っている状態)の緊密な咬合状態が達成できています。

④ 治療後9年(67歳)

デコボコや隙間もなく、よい状態を維持できています。補綴物や充填物も大きな問題は生じていません。歯肉も引き締まったピンク色で、歯周組織も健全であることが推察されます。

現在80歳のBさんは、
今も健全な歯周組織を
維持しています。

★治療後のBさんの言葉

治療してからは以前のように手で口もとを隠さなくてよくなり、話していても唾が飛ばなくなりました。友達と温泉に入ると、皆に「入れ歯を外しなさい」と言われますが、「これ、みんな自分の歯よ!」と自慢しています。



① 治療前(53歳)



② 治療開始から約2年半



③ 治療後(58歳)



④ 治療後9年(67歳)



症例2

52歳で治療を開始し、達成がほぼ確実なCさん(78歳)
主訴: 開咬

① 治療前(53歳)

正面から見ると、奥歯を咬み合わせても上下の前歯が咬み合わない「開咬」の状態。舌で上下の前歯を押す癖があるため、前歯が唇側に傾斜して「空隙(くうげき)歯列」になっていました。また舌が正常な位置より低い位置にある「低位舌(ていゐぜつ)」のため、口腔周囲筋の使い方のトレーニング(MFT)を行ってから矯正歯科治療に入りました。

② 治療開始から約1年半

矯正歯科治療によって上下の前歯の隙間を閉じることができ、上の歯が下の歯にかぶさるようになりました。

③ 治療後(55歳)

2年3か月の治療期間を経て、口もとが改善されました。MFTを行ったことで、舌で前歯を押す癖もなくなりました。

④ 治療後13年(68歳)

唇を自然に閉じることができ、治療直後と変わらない安定した咬み合わせを維持できています。補綴歯(かぶせ物の歯)も含め、28本すべての歯が残った状態で、77歳になった今も矯正歯科を受診されるなど、口腔内の衛生管理にはとても熱心です。

★治療後のCさんの言葉

よく噛めるようになって、ご飯がおいしく食べられるようになりました。先生にはすごく感謝しています。矯正歯科治療をして本当によかった。



さらに詳しく知りたい方は、QRコードから
本会公式サイト内「トレンドウォッチ」をご覧ください。